

# 同音衝突の意味的側面

——高田西部言語地図を中心に——

小林 隆

## 1. はじめに

言語地理学の目的の一つに、語史の推定ということがある。たとえば、「かたつむり」や「肩車」の言語地図を解釈し、これらの語の変遷過程を明らかにしようとする。わが国の言語地理学ではこのような研究が盛んに行われてきたが、J. Gilliéron の「それぞれの語はそれぞれの歴史をもつ<sup>注1</sup>」という命題に従うかぎり、魅力的なテーマと言えるであろう。

しかし、そればかりではなく、そうした個々の事例の蓄積の上に立ち、類形牽引、混交、民衆語源、同音衝突などの語変化の要因自体を考究しようとする研究があってもよいと思われる。もちろん、わが国の言語地理学においても変化の要因について言及はされてきたが、個々の語の変遷を説明するために利用されていた傾向が強く、それ自体の解明が直接の目的となることは少なかったようである。

そのような立場から、ここでは同音衝突を取り上げ考察を行ってみたい。同音衝突は、J. Gilliéron らの言語地理学において強調され、欧米ではかなり研究が進んでいるようであるが、わが国では古く小林好日<sup>注2</sup>氏が扱われた他、最近分布パターンとの関連で馬瀬良雄<sup>注3</sup>氏が問題にされている程度である。そこで、それらの成果を踏まえながら、本稿では特にどのような意味関係にある同音語が衝突を起こすのか、あるいは起こさないのかという問題に焦点をしばって考えてみたいと思う。同音衝突の有無を左右する条件には、使用頻度や位相などもあげられようが、何よりもまず双方の語の意味関係が大きな要因として働いているのではないかと思うからである。

資料は、私が、1979, 80年の2年間に、新潟県高田西部の226地点で、各地点1名70歳前後の生え抜きの男性を対象として行った言語地理学調査の結果を用いた。本稿は言語地図による考察である点、隣接地など他地域からの同音語の侵入による衝突の事例を中心に扱うことになる。なお、ここでとりあげる「同音衝突<sup>注4</sup>」は、衝突の結果として言語地図に同音語の地理的相補分布という形で現れたものとする。

## 2. 同音衝突を起こす場合(1)

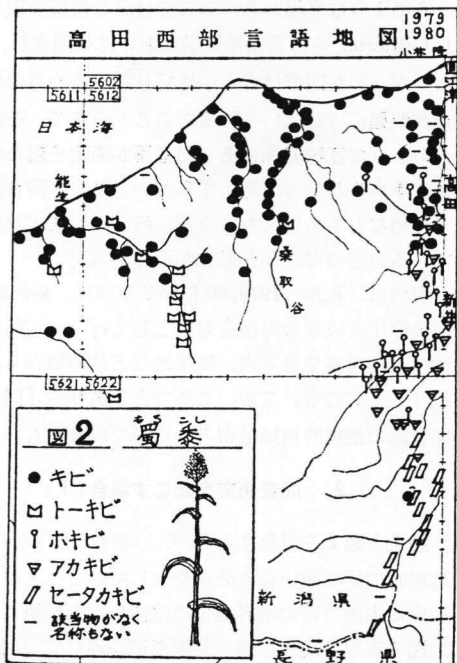
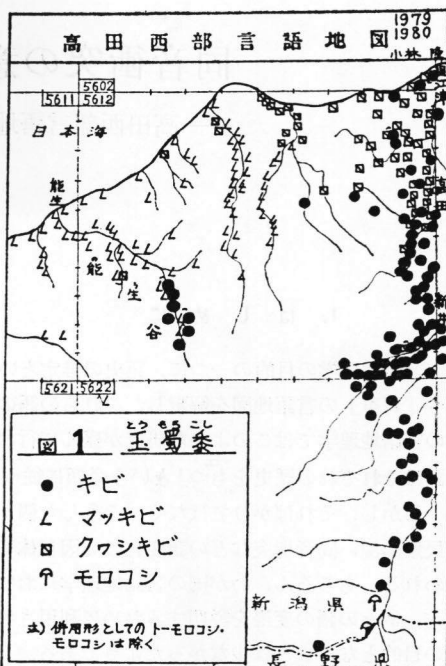
図1と図2を対照すると、そこでは「とうもろこし<sup>注5</sup>」のキビと「もろこし」のキビとが、地理的に見て補い合う分布をなしていることがわかる。この地域、新潟県高田西部は、いわゆる東西方言の境界地帯に位置し、海岸線に沿っての西の富山県側からの影響と、この地図の東端を南北に通る北国街道を通じての長野方面からの影響という2大言語潮流の

(2) 同音衝突の意味的側面

他、この地方の中心地高田からの独自の放射なども考えられ、解釈に難しい点も残る。しかし、今の2枚の地図においては、「とうもろこし」のキビが能生谷上流と高田以南を中心に分断された分布を示していることからその古さを知ることができ、逆に海岸よりに連続して分布する「もろこし」のキビの方を新しい語形と解釈できよう。桑取谷上流に1地点見られる「もろこし」のトーキビは、かつては西部からその周辺までトーキビが分布していたことの証拠であり、それがキビという新しい語形に駆逐されていったことを想像させる。

おそらく、古くこの地域では「とうもろこし」の語形としてキビが広く使用されていた時代があったのであろう。そこへ、たぶん西から「もろこし」の意味のキビが伝播してくるに及び、「とうもろこし」のキビは衝突による混乱を避け、2つの地域に分断されながら後退して行ったと考えられる。そして、「とうもろこし」の意味を新しく担ったのがマッキビとクッシキビであり、『日本言語地図』を見ると、前者が西の糸魚川から、後者が直江津あるいは高田を中心に放射されたものと推定される。マッキビは本来「豆黍」ではなかったかと思われるが、民衆語源では、侵入してきた「もろこし」のキビに対して、「とうもろこし」こそ本當のキビだということで「真黍」という解釈を生み出している。また、クッシキビは、「もろこし」がその実を脱穀・調製する必要があるのに対して、これといった手も加えずに食べられるちょうど「お菓子がわりの黍」ということでクッシキビとされたのであろう。

図3と図4は、それぞれ2語の体系図

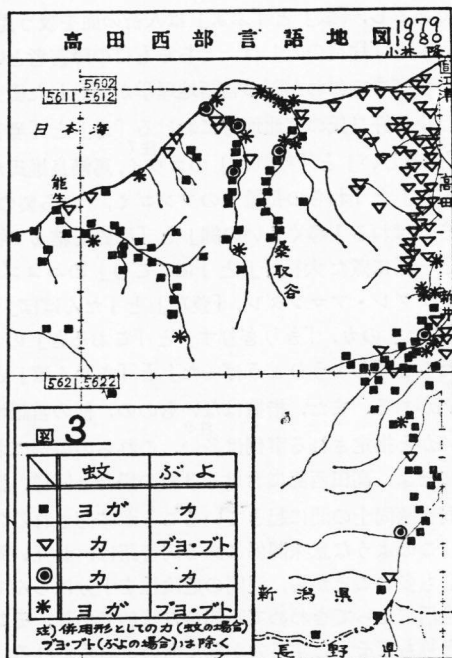


という形で表した。

まず、図3は「蚊」と「ぶよ」を示す語の体系図であるが、両者にカという同じ語形が用いられ、しかも地理的に見て相補分布をなしている。この場合には、桑取谷以西と新井以南とに分断された「蚊」と「ぶよ」をヨガ／カで表す体系が古く、高田を中心に周囲へ放射された様子の読みとれるカ／ブヨ・プトの体系が新しいものであろう。「蚊」と「ぶよ」のそれぞれの言語地図をこのような体系図に描き直すと、ちょうど両者の体系の接触地帯にカ／カというように区別なくカで表す地点と、ヨガ／ブヨ・プトというようにカという語形を使わない地点が集まっていることに気がつく。前者の地点では、古くからの「ぶよ」のカと、新しく侵入してきた「蚊」のカとが今まさに衝突を起こしているものと推測され、そのような事態から、まぎらわしいカという語形を使用しないことにより一時的な解決をはかろうとして生じたのが後者のヨガ／ブヨ・プトという体系だと考えられる。

次に、図4の「両目の見えない人」と「片目の人」の体系図では、メッコという語形がだいたい地理的相補分布を形成している。ただし、東西で対立し多少入り乱れた分布型なので、この図だけでは両者のメッコに新古の判断を下すことが難しい。そこで周囲の状況を見ると、直江津、高田から東へ20kmほど行った海岸部の柿崎と山間部の安塚で共にメッコは「片目の人」の意味のみに使用されており、能生から西へ海岸線に沿って約12km先の糸魚川と20km離れた青海では「両目の見えない人」「片目の人」を合わせてメッコと呼んでいることが、補充調査によりわかった。また、他の調査項目「半煮えの飯」では、「片目の人」のメッコが語源と思われるメッコメンが、調査地点の全域で使用されていることもわかっている。

以上の手がかりから、図4を次のように解釈したい。つまり、この地域ではもともと「片目の人」の意味でメッコが使用されていた時期があり、そのころ「半煮えの飯」のメッコメンも全域に広まった。ところが、能生を中心に「両目の見えない人」のメッコが発生、周囲に放射されるという時代を迎えた。能生谷をさかのぼり、また名立谷など東部方面へ侵入したこの新しいメッコは、「片目の人」のメッコと同音衝突を起こし、後者にはカタメッコなどの語形を代用することにより、メッコ(両目の見えない人)／カタメッコ(片目の人)という体系をつくりだした。しかし、この地図に入らない西の糸魚川方面への伝播では、もともとあった「片目の人」のメッコが「両目の見えない人」のメッコをも受け入れ、メッ



(4) 同音衝突の意味的側面

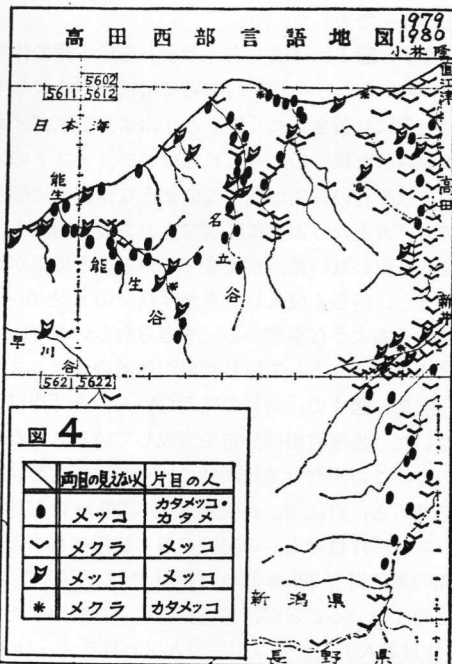
コ/メッコという両方を同じ語形で表す体系が生じることになった、と。

この推定によれば、早川谷上流の「片目の人」のメッコは、古い時代の残存形と判断できよう。それでは、高田周辺と新井以南に点在する「両目の見えない人」のメッコをどう考えたらよいだろうか。この点については、西からの新しいメッコが飛び火的に伝播したということの他に、それぞれの地域独自で「両目の見えない人」のメッコが誕生したということもあったのではないかと想像する。

以上、高田西部における3組の同音衝突の事例について見てきたわけだが、ここでそれらの衝突を起こした2語の意味関係について考えてみると、どの例も同一意味分野に属する同音語同士の間で衝突していることがわかる。「とうもろこし」と「もろこし」は共に農作物の一種であるし、「蚊」と「ぶよ」は人畜の血を吸う昆虫の仲間である。また、「両目の見えない人」と「片目の人」は、どちらも目の障害者というグループに含まれる。

現在までにわが国の言語地理学が発見した衝突例をふりかえると、管見に入ったものでは小林好日氏の東北地方における「母」と「啞者」のアップ注6、『日本言語地図』における「恐ろしい」と「疲れた」のコワイ注7、馬瀬良雄氏が信州をフィールドとして指摘された「もんぺ」と「わらの長靴」のフンゴミ、「わら製の背負袋」と「背負い子」のショイコ、「物をたばねる1尋ぐらいの縄」と「穂先を結んで物をたばねるわら」のユイソ、「魚のあらと一緒に煮た大根汁」と「にこごり」のニコゴリ・ニコグリ、「雨垂れ」と「つらら」のアマダレ・アマンダレ、「萱草」と「たんぼほ」のガンジ・ガンボ・ガンボージ、「蚊」と「ぶよ」のカ、「きりぎりす」と「こおろぎ」のキリギリス、「かまきり」と「おんぶばった」と「しょうりょうばった」と「あめんぼ」と「みずかまきり」のネギサマ、などの事例がある。また、指摘はないもの、他の言語地図集の中にも同音衝突が働いたのではないかと推定される事例は多い。これらの事例における双方の意味的隔りは各組で差があるにせよ、高田西部における3組の場合と同様、衝突はいずれも共通の意味分野に含まれる同音語同士の間で起きていることが確認されるのである注10。

このような意味関係にある同音語は、お互い同じような場面や類似の文脈に登場する機会も多いことから、混同の危険性を十分はらんでいると言える。これは、話者たちの言語生活にとってきわめて不都合な状態であり、そこでそれを回避し、両語の意味の弁別性をとりもどそうとする力が働くものと考えられる。



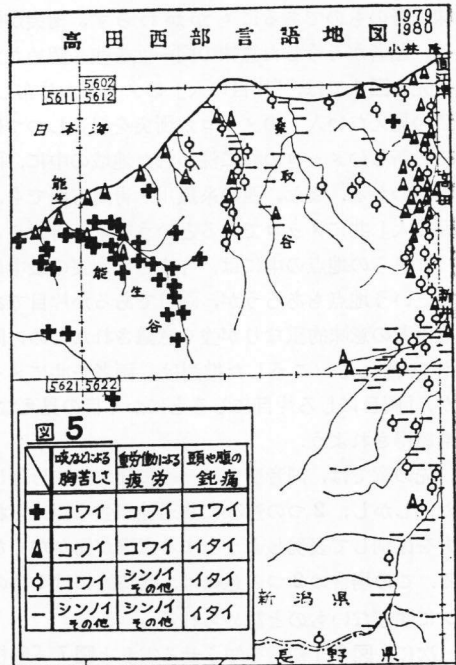
こうした意味関係については、すでに J. Gilliéron-M. Roques が、「衝突は同じ思考の道筋でたかかう語の場合でなければ生じないものである」と述べ、A. Dauzat が「衝突が起こるためには、二つの同音語の意味は同一範疇のものでなければならぬ」と説明しており、私の以上の考察も、ほぼ同様の結論に達したといえることができる。

### 3. 同音衝突を起こさない場合

図5は「咳などによる胸苦しき」「重労働による疲労」「頭や腹の鈍痛」のそれぞれの場合に、コワイという形容詞を使うかどうか注目して描いた3つの意味の総合図である。桑取谷と新井以南を除いた他の地域ではコワイが段階的に重なり合って分布する様子を見ることができ、特に能生谷以西では3つの場合にコワイを使用している。また、能生を中心とした地域では、インフォーマントから「昔からコワイを使っている」という発言を聞いているのに対して、高田方面では「コワイは新しいハイカラなことばで、若い人がよく使う」という情報を得ている。

以上のような地理的分布とインフォーマントの新古の判断から推測するならば、おそらく桑取谷と新井以南に多い、シンノイ(胸苦しき)/シンノイ(疲労)/イタイ(鈍痛)というコワイを全く用いない体系が古く、そこへ西の方から、まず「咳などによる胸苦しき」のコワイ、次に「重労働による疲労」のコワイ、最後に「頭や腹の鈍痛」のコワイという順序でちょうど前のコワイに後からのコワイが積み重なるようにして伝播が行われたものと考えられる。東部のコワイは、高田からの独自の放射とも思われるが、高田が西からのコワイの伝播を桑取谷より先に受けとめ、それを周囲に放射しているものとも推定されよう。なお、能生の海岸部にコワイ/コワイ/イタイの体系が優勢なのは、一旦すべてコワイで表す体系が成立した後に、標準語のイタイが巻き返しをはかったためと思われる。

さて、これら3つの意味はすべて人体の病的状態に関するものであり、その点で同一意味分野に入るから、先の考察の結果からするならば同音衝突が生じて不思議はないはずである。しかし、頭脳の作業における疲労や、けがによる手足などの痛みにはコワイは用いないというインフォーマントの内省を考え合わせると、3つの意味にはきわめて類似性が強く、「体感する重圧感・大儀感」とでもいうべき点で1つの意味としてとらえることさえできるのに気がつく。新しい意味をもったコワイの伝播に対して、それらが同じ意



(6) 同音衝突の意味的側面

味分野のものであるにもかかわらず、衝突が起きずに重なり合っの分布が許されたのは、話者がそうした意味の同一性を強く認めたためではないかと考えられる。

先の図4では、「片目の人」のメッコが分布しているところへ、能生から放射された「両目の見えない人」のメッコが衝突を起こしつつ侵入したと推定した。しかし、よく見るとその新しいメッコの波に洗われた地域の中に、両方をメッコと呼ぶ地点も散在していることがわかる。また、西の糸魚川・青海方面でも、補充調査からは「両目の見えない人」「片目の人」共にメッコであるという結果を得たことを先に述べた。

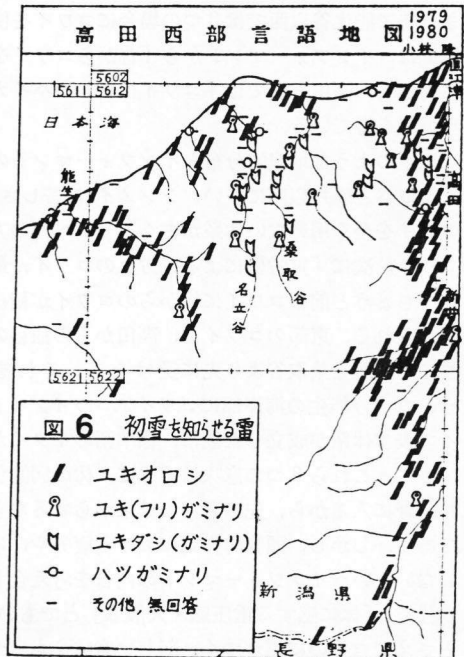
これらの地点の中には、今まさに衝突の最中にあるため2つのメッコが同時に回答されたという地点もあるが、両目であるか片目であるかはさておき、「目の見えない人」という両者の意味的重なりが強く意識されたため、同音衝突が起こらなかったのではないかとも思われる。こうした推測は、両者を共にメッコと呼ぶ地点のインフォーマントの多くが、「両目にしろ片目にしろとにかく目の見えない人はメッコだ」と答えていることから納得されよう。

先の章では、同音衝突は一般に同一意味分野に属する同音語同士の間で起こることを見た。しかし、2つの意味に共通性が強く認められるほど相違が小さい場合には、話者に双方を区別して表現しようとする意識が働かなくなり、衝突も発生しないと言えるようである。この場合の2つの意味は、共時的には1語の多義かあるいは1語1義のバリエーションにすぎないものと認められる<sup>注13</sup>。

次に、図6「初雪を知らせる雷」と図7「屋根の除雪」について考えたい。両者ともに

ユキオロシという語形が優勢であるが、まず図6では、ユキオロシがユキ(フリ)ガミナリ、ユキダシ(ガミナリ)を名立谷、桑取谷などへ押し込めてしまった様子を見ることができる。能生谷上流や新井以南にわずかに分布するユキ(フリ)ガミナリは、その際の残存形であろう。なお、ユキオロシのアクセントは、桑取谷以西で起伏型○○○○○、それより東で平板型を示すことからすると、アクセントの異なるユキオロシはそれぞれ別の経路でこの地域に侵入し、ユキ(フリ)ガミナリやユキダシ(ガミナリ)を両方からはさみうちにしたのかもしれない。

図7では、ユキホリという語形もかなり分布している。実は、これは「屋根の除雪」のみではなく「地面の除雪」をも表す語形であり、後者の意味では全域にわたって使用されているようである。お



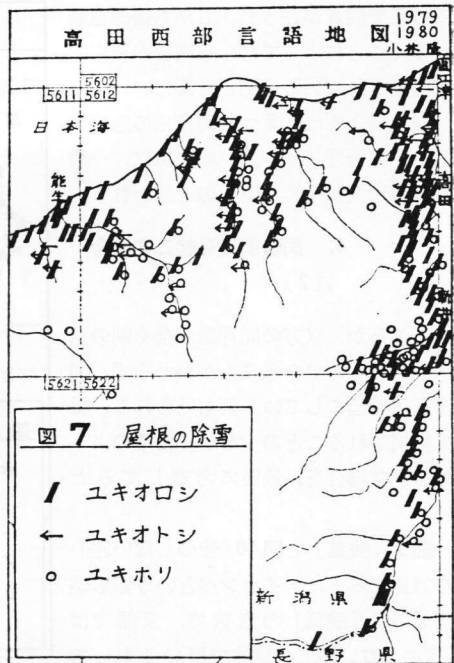
そらく、屋根も地面も区別なくユキホリで示す体系が古いものと推測されるが、積雪量の少ない海岸部や平野部では、屋根の雪は「掘る」より「下ろす」という意識からユキオロシという語形が使用されるようになったのであろう。このユキオロシはいわば町のことばであり、その威光のもとに積雪量の多い山間部にまで入り込んで来たのが現在地図に見られる状態と考えられる。

さて、ここで2枚の地図を比較すると、両図のユキオロシという語形が名立谷、桑取谷を除いて多くの地点で同時に使用されていることがわかる。「初雪を知らせる雷」のユキオロシにおける東側と西側のアクセントの対立は、「屋根の除雪」にもそのままあてはまり、したがって各地点において2つの意味のユキオロシはまったくの同音と言え、それが地図のように重なり合う分布を示しているのは、両者の伝播に際して同音衝突が起こらなかったことを意味していると考えられよう。<sup>注14</sup>

双方の意味について検討すると、「初雪を知らせる雷」のユキオロシと「屋根の除雪」のユキオロシとはなるほど共に雪と関係してはいるが、前者が気象現象であり、後者が労働作業であるので、同一意味分野に属する同音語とは言い難い。そのため、両者は同じような文脈に現れることも少なく、さらに「初雪を知らせる雷」は初冬、「屋根の除雪」は真冬という季節の差により使用される場面も異なっている。このような場合、話者たちはもしかすると、両者が同音であることにすら気づかずに言語生活を営んでいるのかもしれない。とするならば、同音衝突を起こさない理由もうなずけるわけである。

図8「かくれんぼ」の例も衝突は起こしていない場合である。ここでは、メッコという能生を中心に周囲へ放射されたらしい語形が見られるが、先ほどの図4と比較すると、「両目の見えない人」のメッコが優勢な地域に、「かくれんぼ」のメッコがほぼ含まれる様子を見ることができる。おそらく、「両目の見えない人」のメッコが広まり地歩を固めた後を追うようにして「かくれんぼ」のメッコが伝播したのではないかと思う。

実は、この両者のメッコの間には、語源意識の介在がある。つまり、「かくれんぼ」は両目をふさいだ者（メッコ）が鬼になって遊ぶあそびだからメッコだ、という語源解釈をかなりの地点で聞いてきている。しかし、だからといって、両者が同じ意味分野に属するというにはならない。共時的には、「かくれんぼ」のメッコがあそびの一種、「両目の見えない人」のメッコは障害者の名称であるからである。この場合は、意味分野を異にす



(8) 同音衝突の意味的側面

ることで同音が許され、しかも語源意識が働くことによってむしろ同音が積極的に奨励されている事例と考えたい。

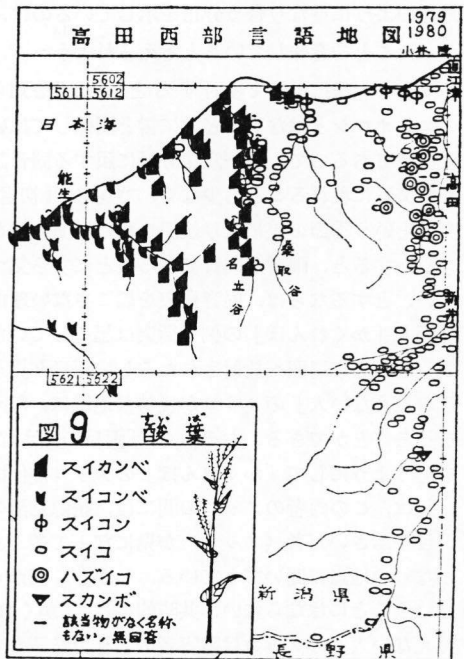
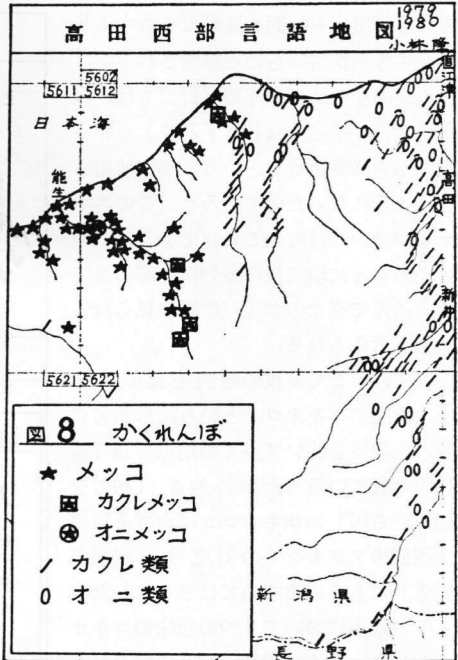
以上のように、2つの同音語の意味が同一意味分野に属さない場合には、一般に同音衝突は生じないものと思われる。

4. 同音衝突を起こす場合  
(2)

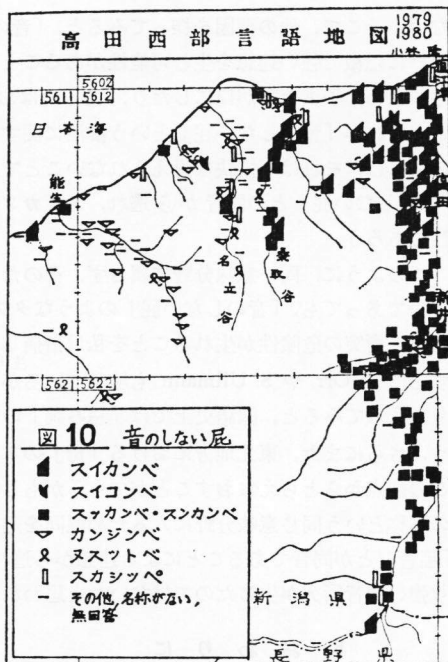
ところが、双方の同音語が全く別の意味分野のものであるにもかかわらず、同音衝突を起こしている例も見られる。従来指摘されることの少なかったそのような特別な場合を、最後に考察してみた。

図9「<sup>すいばんべ</sup>酸葉」と図10「音のしない尻」を対比すると、スイカンベという語形が西部では「酸葉」の意味で、東部では「音のしない尻」の意味で用いられ、ちょうど補い合うような分布を示していることに気がつく。一見、無関係と思われる両項目が、なぜこのような分布を見せるのであろうか。両者のスイカンベの接触地帯である名立谷と桑取谷とは距離も近く、何本もの尾根越しの道を通じて交流がある。そのため他の項目を総合して考えても、この2つの谷の間にはっきりした言語境界線が引かれることは少なく、むしろ同じ語形が分布していることの方が多し。したがって、互いに無関係な項目でも、地勢や文化圏の差によってここに等語線が集中したとは考えにくい。むしろこれには、同音衝突の介入した次のような歴史的事情があったのではないかと推測される。

すなわち、「酸葉」のスイカンベは、現在でこそ東部に分布は見られないが、古くはかなり広くこの地域を支配してい



た時代があったのではなからうか。そのころには、「音のしない尻」の語形としてカンジンベやスカシッベなどがやはり全域に分布していたらしく、東部にその残存形らしきものが確認される。ところが、そこへ北国街道に沿って長野方面から「音のしない尻」のスッカンベ・スンカンベが侵入し、このスッカンベ・スンカンベから高田付近でスイカンベが生れた。「水の中(水間)で放ったような音のしない尻だから」という民衆語源を聞いているが、「音のしない尻」のスイカンベの成立には、そうした語源意識と、さらには無意識のうちに働いた「酸葉」のスイカンベとの類形牽引などが参与していたのであろう。ところで、スッカンベ・スンカンベという語形の存在は、それらの伝播の時点ですでに「酸葉」のスイカンベとの間に類音衝突が起きていたことも想像させる。しかし、ともかく両者をスイカンベと言い表すようになって今度は同音衝突が発生し、「音のしない尻」のスイカンベの分布領域の拡大にともなって、「酸葉」のスイカンベは新たな語形スイコに席を譲りつつ西へ退いて行った。直江津から桑取谷の海岸部にかけて見られるスイコは、スイカンベの退却の際に、その後を引き継いだスイコとの間に生れた混交形ではなかったかと考える。



以上は、「酸葉」のスイカンベの分布を、「音のしない尻」のスイカンベが衝突を起しつつ東から侵略したという推定であるが、次のような解釈も提出できよう。つまり、「酸葉」のスイカンベとスイコの分布は、比較的古くから現在に近い状態で固定化していた。そこへ「音のしない尻」のスイカンベが東から押し寄せ桑取谷までは手中に収めることができたが、名立谷へは「酸葉」のスイカンベとの同音衝突を避けてなかなか入り込めないでいる、という推定である。この場合には、東部に「酸葉」のスイカンベが全く見られないことの説明がつけやすい。

ただし、私としては、「音のしない尻」のスッカンベ・スンカンベから高田付近におけるスイカンベへの変化に、「酸葉」のスイカンベとの類形牽引が関係しているのではないかと思うことと、以下に述べるような両者の意味関係からかなり強力な衝突が生じ、その結果東部では「酸葉」のスイカンベが全く滅んでしまったとも考えられるところから、前者の立場をとることにしたい。

さて、「酸葉」と「音のしない尻」とは、全く別な意味分野に属しながら、なぜこのように同音衝突が生じたのであろうか。混同を回避するという実用的な力が作用したはずは

## (10) 同音衝突の意味的側面

ない。そこで、他の要因を探ってみると、「音のしない屁」はいわばタブーであり、それだけに隠微で強い連想を生む可能性があることに気づく。一方「酸葉」は茎や葉に酸味をもつため、子供たちが口にしたり、あるいはおひたしなどとして食膳にのぼる植物である。それが「音のしない屁」という排泄に関する悪臭のあるものと同音で強い連想が働くとすれば、それは不愉快な耐えられないことであるに違いない。そこで、「酸葉」の方が「音のしない屁」との同音から逃れ、スイカンベを他の語形に交替させたと考えるのが妥当であろう。

このように、同一意味分野に属さず、そのため普通は衝突を起こさないと考えられる同音語であっても、「音のしない屁」のようなタブーなどと関わり不愉快な連想が働く場合には、衝突の危険性が生れることを私は指摘したつもりである。こうした点については、すでに J. Orr や S. Ullmann も触れているが、日本<sup>注16</sup>で現在までに知られている事例をふりかえてみると、国語史上では「忌み詞」の一部などがこの場合に類するものである<sup>注17</sup>。さらにまた、東北地方における「母」のアップと「嘔者」のアップの同音衝突なども、この観点からとらえなおすことができるかもしれない。つまり、「母」も「嘔者」も人間の名称という同じ意味分野に入るため混同を避けようとする実的な要因の他に、「母」と「嘔者」とが同音であることによる連想から逃れたいという感情的要因も加味されて、より強い同音衝突が生じたのではないかと思われるのである。

## 5. お わ り に

以上の考察により、同音語の意味的条件と同音衝突の有無の関係をまとめると次のようになる。

1. 双方の同音語が同一意味分野に属する場合
  - 1-1. 話者がその差異を強く識別するほど隔った意味関係にあるとき：→同音衝突の可能性は高い
  - 1-2. 話者がその共通性を強く認めるほど近い意味関係にあるとき：→同音衝突の可能性は低い
2. 双方の同音語が同一意味分野に属さない場合
  - 2-1. 一般的には同音衝突の可能性は低い
  - 2-2. 話者に不愉快な連想が働くとき：→同音衝突の可能性がある

同音衝突は方言というフィールドだけでなく、現代語一般でも、また国語史上でも生じているはずである。私は文献国語史上における同音衝突について一例を報告したことがあ<sup>注18</sup>るが、音韻変化の結果による衝突である点など、本稿で扱った事例とは多少事情が異なっていた。現代語一般における同音衝突も、あるいはこれらとはまた趣を異にする面が見られるかとも思われる。しかし、意味関係と衝突の有無に関する大綱は、本稿の結論と共通性があるのではないかという見通しを持っている。

なお、今回は言語地図から、衝突した結果の確認、追跡、推定を行うことが主となり、同音衝突における現実の状態の観察や、話者の意識調査については、必ずしも十分ではなかった。さらに、同音衝突といっても、本稿のテーマである意味の問題の他いろいろな側

面が残されているので、今後それらの総合的研究を目ざしたいと考える。

- 注1 原文は 'chaque mot a son histoire.' I. Jordan-J. Orr: An Introduction to Romance Linguistics (Oxford, 1970) p. 170 による。
- 注2 小林好日『方言語彙学的研究』(岩波書店, 1950年) p. 127~141。
- 注3 馬瀬良雄「同音衝突——相補分布との関連で——」(『国語学』119集, 1979年)。
- 注4 これは、注3の馬瀬氏と同様の考え方である。ただし、柴田武氏(『国語学大辞典』p. 318)の言われるような、特に両語の接触地域に新形が現れた場合のみに同音衝突を限るわけではない。
- 注5 キビと呼ばれる作物には、他に日本古来の「きび」が予想される。しかし、高田西部では、インフォーマントの世代以前にこの作物を栽培しなくなっていたようであり、数地点でコキビ、イナキビなどの名称が聞かれたにすぎない。したがって、「とうもろこし」と「もろこし」の地図の解釈に加えることはできなかった。
- 注6 注2に同じ。同書巻末には、小林好日氏が調査資料から描かれた簡略的な言語地図が付されているが、子細は、半沢幹一氏が同資料により各地点押印の形で作製しなおされたもの(東北大学国語学研究室保管)によって確認できる。なお、同書には「母」と「唾者」のアップの衝突の他、「大切な物」と「つまらない物」のアッタラモノ、「はなはだ」と「むしろ」のイツの衝突が指摘されているが、言語地図による考察ではない。
- 注7 国立国語研究所『日本言語地図解説』1(1966年)、徳川宗賢編『日本の方言地図』(中公新書, 1979年)。
- 注8 注3に同じ。ただし、「もんべ」と「わらの長靴」のフンゴミについては「ある山村地帯での「もんべ」の方言分布」(『国語学』59集, 1964年)、「蚊」と「ぶよ」のカについては『信州の方言』(第一法規, 1971年)などでも扱っておられる。
- 注9 たとえば、「舌」と「よだれ」のペロ、「土間」と「前庭・仕事場」のニワ、「明明後日」と「明明明後日」のシアサッチ・シワサッチ・シガサッチ(以上、国立国語研究所『日本言語地図』)、「かえる」と「がまがえる」のアンゴ、「二男以下の男の子」と「男の一人者」のオジ・オンジ・オンツァマ、「二女以下の女の子」と「女の一人者」のオバ・オンバ、「あかぎれ」と「手の甲のひび」のヒビ(以上、大橋勝男『関東地方方言事象分布地図』)、「かえる」と「ひきがえる」のアンゴ、「おおばこ」と「どくだみ」のゲールロッパ・アンゴッパ(以上、学習院大学方言研究会『夷隅川流域方言地図』)、「かまきり」と「とかげ・かなへび」のカマギッチョ・カマゲッチョ(学習院大学方言研究会『安房鴨川付近方言地図』)、「かえる」と「ひきがえる」のアンゴ(千葉大学文学部国語学研究室『千葉県君津地方言語地図』)、「しおからい」と「からい」のライ(信州大学方言研究会『木曾及びその周辺地方の言語地図』)、「きんばえ・便所にいる大きなはえ」と「まるはなばち」のペポー・ペーポ(馬瀬良雄『上伊那及びその周辺地方の言語地図』)、「あさっての翌日」と「あさっての翌々日」のシアサッチ・シワサッチ(グロータース「糸魚川地方における標準語と同じ語彙体系の形成について」(『国語学』59集, 1964年))、「はおじろ」と「しじゅうから」のホージロ、「腕白小僧」と「わがままな子供」のジラゴ・ジラモン、「斜視」と「近視で目を細めて見る目」のサガメ(以上、広戸惇『中国地方五県言語地図』)、「舌」と「唾」のツバ・ツワ(宮本登『関門海峡周辺方言地図』)などの事例。

(12) 同音衝突の意味的側面

注10 同一意味分野といえども、「両目の見えない人」と「片目の人」のメッコの場合は「目の障害者の名称」, 「母」と「嘔者」のアップの場合は「人間の名称」というように、ケースによってかなり具体的で狭い場合と、比較的抽象的で広い場合があるようである。どの程度抽象的で広い意味分野まで衝突が起こるかは今後吟味してゆきたいと考えるが、双方の同音語の間にあまりにも抽象的な意味分野しか想定できない場合には、衝突は生じないと思われる。また、この点については品詞によっても違いがあるうかと予想する。

注11 S. Ullmann 著山口秀夫訳『意味論』(紀伊国屋書店, 1964年) p. 137 「同じ思考の道筋」は同書の引く原文で 'les mêmes chemins de la pensée' (Études de Géographie Linguistique (Paris, 1912) p. 149) とある。

注12 A. Dauzat 著松原秀治・横山紀子訳『フランス言語地理学』(大学書林, 1958年) p. 87 「同一範疇」は原文で 'le même plan sémantique' (La Géographie Linguistique (Paris, 1922) p. 69) とある。

注13 この点について A. Dauzat は「衝突が起るためには、まず、この二つの同音語の意味が絶対的に相容れないものでなければならない。一方では、一つの語は、多少とも類縁のあるいくつかの意味をもっても少しも差支えないのである。一語の多義性は、一言語にとってじやまなものではないからである。」(注12の文献 p. 86, 87 原著 p. 69) と述べている。

注14 図6「初雪を知らせる雷」のユキダシ(ガミナリ)は、名立谷、桑取谷という比較的古い語形を残しやすい地域に分布することから見て、ユキオロシに追いやられた残存形と推測したが、これは図7「屋根の除雪」のユキオロシとの同音衝突の結果、2つの谷で新たに生じた語形ではないかという疑問の余地も残る。しかし、今は衝突を起こさず重なり合う分布を示している地域の方がはるかに広いことに注目して、このテーマについて述べたのが趣旨である。

注15 能生周辺に分布する「酸葉」のスイコンベについては、補充調査によれば西の糸魚川でも同じ語形を使うこと、また中平解「スイコとウマズイコ」(『民間伝承』253~256号, 1956年)によれば、長野県一帯にスイコが広く分布していること、などから考えて、長野県のスイコが大糸線沿いにも北上し、糸魚川付近でもともとあったスイカンベと混交を起し、スイコンベが誕生、それが能生周辺まで伝播してきたものではないかと推測される。なお、名立谷のスイコンベはこれとは別に、桑取谷から尾根越しの道を通じて入り込んだスイコとの混交で独自に生じたものであろう。

注16 J. Orr 'Any consonance which savors of the grotesque, of the ridiculous, or the improper is apt to be avoided' (Words and Sounds in English and French (Oxford, 1953) p. 104) また、S. Ullmann 「どんなに遠回しにでも、不愉快な、不行儀な、または可笑しい連想を起こさせる語音の類似は潜在的に病的である」(注11の文献 p. 138, 139)

注17 注2に同じ。

注18 拙稿「<sup>ㇿ</sup>もち(餅)と<sup>ㇿ</sup>とりもち(鳥糞)の語史」(『文芸研究』94集, 1980年)。

〔付〕本稿は第31回日本方言研究会(昭和55年10月, 会場・信州大学)で発表したものを一部修正してまとめたものである。